

「平和を祈る会」

被爆証言

山崎 敦子

このような証言をしますのは初めての事です。被爆の体験というのは、姉妹、親子の間でも、そして友人たちとも、それに触れて語り合うのは避けてきたような気がします。この度この証言のために友人たちに聞いてみると、まるで、昨日のこのようにリアルに体験を語ってくれました。

一九四四年の十月に、生まれ育った家が強制疎開になり、父は出征、私は母と二人の姉と、皆実町のひと筋東の大通りに住んでいました。

小学五年の私は、「あの日」、登校日で食卓で朝食を待っていました。母と上の姉がお釜を下ろした時、その時ピカツととても鋭い光が走って、黄色いような青いような、何とも形容できない鋭い光を感じて、おやと思った瞬間にどかんと来て、家がぐらぐら揺らいた気がして周囲が真っ暗になりました。しばらくして薄明るくなると、お釜がひっくり返り、食卓は飛ばされ、疎開していない大きな家具にはガラスがたくさんささっていました。さっきまで私の横にいた犬は、不思議なことに二階で鳴いているのです。行ってみますと、階段はすんと抜け落ち、天井も落ち、屋根にはぽっかり穴が開いて空が見えました。母と上の姉は土間に転んでいて、中の姉はちょうど風呂場から出ようとした時、外の方にニメートル位吹き飛ばされていました。家族一同はあまり大怪我もありませんでしたので、裏口から避難しようとして外に出ましたところ、隣家のおばさんとお姉さんが、顔や手に火傷をおっていました。二人は、髪を外で乾かしていて、ピカツと射した光で瞬間的に火傷をしたということでした。

それからどれくらい時間が経ったのでしょうか、専売公社の方から、異様な姿の人たちがよろよろ、そろそろと放心状態で歩いてきていました。髪はぼさぼさ、ほこりをかぶり、衣服は着ているのかいないのか、焼け焦げて、男女の区別はつかず、真っ黒な顔で多くの人が、両手を挙げ、それを広げて「痛い、痛い」とか「水、水をください」とか口々に言っておられて……。ほんとは地獄のような怖い状況で、その日の時間感覚、昼なのか夕方なのかまったく分からず、沢山の人が行ったり帰ったり、御幸橋から先、そして比治山の方も、火の手が上がリ、橋を渡る事ができなくて混乱の極みを呈していました。

二人の友人は、当日掃除当番で、八時前に登校、掃除を始めたとき、校舎が倒れ下敷きになり

ました。ひとりの友人は、後日、若年性白内障になって三十代で手術を受けたということです。もうひとりの友人は、二階の廊下で、地上からうわっと黒い雲が鬼のような形でわき上がって向かって来るのを見て教室に入ろうとした瞬間、下敷きになり、四時間後に足を押さえていた垂木を切ってもらって救出されましたが、中学、高校の体育の授業には参加できず、いつも見学だったそうです。

忘れられないのは、胸元に赤ちゃんを抱いた女の人に、彼女が亡くなる前に水を求めているのに、水を飲むと死を早めるといわれて、飲ませてあげられなかったこと、もうひとり、火傷にキュウリの絞り汁しか塗れないまま、亡くなった同学年の男の子のことです。

夫の実家は爆心地の天神町にありました。夫は当時呉工廠に学徒動員されていましたが、観音町の母校に連絡のため帰宅していて、あの日、たまたま登校した瞬間に建物の下敷きになり、体にガラス片を浴び、足や太ももに怪我をし、目も怪我で片眼はよく見えなかったのですが、己斐方面で一夜を明かし、相生橋から自宅に向かったが、一面焼野原で人影はありませんでした。夫の母と名古屋から疎開のために来広していた叔母と幼い子ども三人は即死でした。夫は、死を思い、水を飲むと何日かは生きられるかと元安川に降り、死体をよけながら水を飲んだそうです。

天神町の碑が、「原爆死没者追悼平和祈念館」のすぐ南側にあり、その鋼板に死者の名前が刻んであります。平和公園というのは、私たちにとっては大きな墓場に思えます。桜の花が咲く頃になりました、花がきれいだね、と愛でたり、弁当を食べたりなどということは、いまだにできません。六十五年経ったいまも、心と体に残った傷跡というものは、これからも消えることはないと思います。

毎年平和集会というものがあって、平和が大切なのだと確認されますが、戦争の愚かな結末の傷跡を残した広島、長崎の惨劇というものは二度とあってはならない、この地上から核兵器を廃絶しなければいけないと思うものです。